



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	哀歌の詩的技法（2） Poetic Devices in the Book of Lamentations (2)
Author(s)	勝村 弘也 (Hiroya Katsumura)
<i>Citation</i>	キリスト教論藻 (KIRISUTOKYO RONSO) Bulletin of the Institute for Research of Christian Culture, No.30 : 1-26
Issue Date	1998
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

哀歌の詩的技法(2)

勝村弘也

1. はじめに
2. 哀歌研究の問題点
3. 付説：ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚
4. 哀歌第2章（以上前号）
5. 哀歌第1章

5. 哀歌第1章

5.1. 第1のアルファベット歌の逐語訳

※ 以下の私訳において（ ）は、訳文を整えるために補った語であることを示す。また〈 〉は、正文批判の結果、読み変えを行なった箇所を示す。〔 〕は、後代の付加であるから削除されるべきであると判断される箇所である。

- 1 ああ、何と、
ひとりぼっちで座っている、民がおおくいたこの町が。
寡婦のようになってしまった、諸国民の中でおおくなる者であったが。
諸国の中の女王は、隷属の身となった。
- 2 彼女は、夜に、泣きに泣いている。その涙は、ほほをつたう。
彼女には慰める者がいない、彼女の愛人たちのうちには。
恋人たちはみな、彼女を裏切って、彼女の敵となってしまった。

- 3 ユダは、苦しみと苛酷な服役（の場）から、逃亡した。
彼女は諸国民の中に住んで、安らぎを見出せない。
彼女を追う者たちはみな、袋小路で彼女に追いつく。
- 4 シオンへの道は、嘆いている。祭りに来る者がいないのだ。
彼女の門はみな、荒れ廃れて、祭司たちはため息をついている。
彼女のおとめたちは苦悩する。そして彼女にはつらさがある。
- 5 彼女の仇敵どもは頭となり、彼女の敵どもは安泰である。
ヤハウエが、彼女を苦しめているのだ、彼女の多くの犯行の故に。
彼女の幼な子らは、捕囚となって仇の前に引かれて行った。
- 6 シオンの娘から、栄華はことごとく去って行き、
彼女の高官たちは、牧草を見つけれない鹿のようになった。
そして、追う者の前を、力なく歩いて行った。
- 7 イエルサレムは、彼女の苦しみとさすらいの日々を、思い起す。
[いにしえの日にあった彼女のすべての宝物を]。
彼女の民が仇の手にかかって倒れた時、彼女を救ける者はいなかった。
仇敵どもは彼女を見て、その最期を嘲笑った。
- 8 イエルサレムは、重大な罪を犯した。それ故に、穢れた者となった。
彼女を尊敬していた者たちはみな、彼女を卑しめた。
彼らが彼女の恥部を見たからだ。
彼女は、呻き声をあげ、背を向けた。
- 9 彼女の衣の裾が不浄となっても、彼女は自分の終わりを思わなかった。
彼女は驚くほど落ちぶれたが、彼女には慰める者がいない。
「ヤハウエよ、わたしの苦しみを見てください。
敵は増長しているのです」。
- 10 彼女のすべての宝物に、仇敵はその手を広げた。
まことに、彼女は異邦人が彼女の聖所に入るのを見た。
あなたの集會に彼らは入ってはならないと命じられたのに。
- 11 彼女の民はみな、ため息をつきながら、パンを探している。

彼らは元気を取り戻すために、彼らの宝物を食物にした。

「ヤハウエよ、見て下さい。ご覧になって下さい。

まことに、わたしは卑しい女になりました」。

- 12 あなた方のことではありません。道を通り過ぎて行くみなさま。
ご覧になって下さい。見て下さい。
わたしになされた、わたしの痛みのような痛みがあるものかどうかを、
ヤハウエが、燃え立つ御怒りの日に(わたしを)苦しめた
(ような痛みが)。
- 13 彼は高い所から火を送り、わたしの骨の中にまでく下らせた。>
彼はわたしの足に綱を広げ、わたしを仰向けにひっくり返した。
わたしを荒れ廃れた女、終日さわりのある者にした。
- 14 わたしの過誤は、くわたしに重くのしかかる>
彼の手によって絡みつけられて。
わたしの首のく彼の軛が>、わたしの力をくじいた。
主は對抗することの出来ない(者の)手に、わたしを渡された。
- 15 主は、わたしの中で、すべての強者たちを投げ捨て、
わたしの若者たちを打ち砕くために、わたしに対して祭りを召集した。
主は、おとめ、ユダの娘に、
酒槽に踏み入(るように、ふるま)った。
- 16 これらのことで、わたしは泣いている。
わたしの眼、わたしの眼から水が流れ下る。
まことに慰める者はわたしから遠い、わたしの元気を回復させる者は。
わたしの息子たちは、荒れ廃れた者となった、
敵があまりにも強かったからだ。
- 17 シオンは、彼女の手を広げるが、彼女には慰める者がいない。
ヤハウエはヤコブに対して、
彼を取り巻く者たちが仇敵(となるよう)命じられた。

イエルサレムは、彼らの間で穢れた者となった。

- 18 ヤハウエは、義しい。彼の口にわたしが反抗したのだ。
諸国の民はみな、聴いて下さい。そしてわたしの痛みを見て下さい。
わたしのおとめらも、若者たちも捕囚となって引かれて行った。
- 19 わたしを愛した者たちに叫んだが、彼らはわたしを見殺しにした。
わたしの祭司たちも長老たちも、町の中で息絶えた。
まことに、彼らは食物を探し求めたが、〈自分を欺いただけだった〉。
- 20 「ヤハウエよ、見て下さい。まことに、わたしは困窮し、
わたしの内臓は煮え返る。
わたしの心臓は、わたしの中でひっくり返っています。
わたしが反抗に反抗したからです。
街角から剣が子らを奪い去り、家の中では〈捕囚が〉。
- 21 わたしが呻くのを、彼らは聴きました。
わたしには、慰める者がいない。
わたしの敵はみな、わたしの災難を聴いて、
喜んでいます、あなたが(それを) なさったのだと。
あなたは告げた日を來たらせられる。
彼らがわたしのようにになりますように。
- 22 彼らのすべての悪を御前に來たらせ、彼らにもして下さい、
わたしのすべての犯行の故に、あなたがわたしになさったように。
わたしのため息はおおく、わたしの心は痛み衰えています」。

5.2. 哀歌第1章の語句注解⁽¹⁾

1節1行目「ひとりぼっちで座っている」。この歌ではイエルサレムの町、およびその住民が、一貫して一人の女性として擬人化されている。1節3行目の「女王」と訳した語(サーラーの連語形サーラーティー)は、1・6・2で「高官」と訳した語の女性形である。「貴婦人」等とも訳せる。

2節3行目で用いられている動詞 bgd「裏切る」は、不誠実な行動をさす

が(箴言11・3、6、13・2、イザヤ書24・16、33・1等)、特に男女関係に用いられることがある(出エジプト記21・8、エレミヤ書3・20、マラキ書2・14以下参照)。

3節1行目の解釈については、激しく論争されている。口語訳では「ユダは悩みのゆえに、また激しい苦役のゆえにのがれて行って」、新改訳では「ユダは悩みと多くの労役のうちに捕らえ移された」、新共同訳では「貧苦と重い苦役の末にユダは捕囚となって行き」となっている。問題はヘブライ語のガーラー・ミンの解釈にある。前置詞ミンは、直訳すれば「……から」であるからこの行の後半は、ひとまず「苦しみから、また苛酷な服役から」と訳せる。動詞ガーラーは、普通〈バビロン捕囚〉に関連する動詞と解釈されるが、この箇所用法ではカル形であるから、辞書的には「(捕囚に)出発する」という意味しかない。つまりここにはユダヤ人が〈捕囚として連れ去られる〉というような受動的な意味はないのである。ところが七十人訳は、この動詞をバビロン捕囚に関連させ、受動的に訳した。Saltersによるとこれが、後世のつまずきの元となった。⁽²⁾ガーラーのカル形の意味は、go into exileである。われわれは英語の exile からただちにバビロン捕囚を連想するかもしれないが、exileには元来〈捕囚〉の意味はない(!)。亡命生活のことである。われわれが exile という語を聖書の文脈で見たときに、ただちにバビロン捕囚を考えてしまうように、ヘブライ語のガーラーを見たときにやはりバビロン捕囚しか思いつかないということが、すでに古代の解釈者に起こったらしい。繰り返すがガーラーの意味は、「亡命生活に出る」「移民する」である。つまりここではユダは、強制的にはなくて、自ら出発したことが問題になっている。ガーラーを捕囚の意味にとるとミン「……から」がなぞになる。それで新改訳や新共同訳のような苦し紛れの訳文が出現することにならざるをえない。口語訳はミンを原因の意味に解釈する伝統的読みにしたがっている(例えば KJV を参照せよ)。口語訳がテキストの背後の歴史的状況をどのように想定したのかは明らかではないが、訳文「のがれて行って」は正しい。では「苦しみと苛酷な服役」は、いつごろのどのような状況を指すのか。われわれはエレミヤ書40章以下のゲダリヤ時代以降の物語からかつてのユダの住民

が周辺諸国に亡命した事実を知ることができる。ゲダリヤ暗殺以後、エジプトに逃れた人々のことも知っている。前587年以降のユダの社会的崩壊は、かつての王国の住民の意図的な脱出——換言すれば「逃亡」——によって加速された面もあるのである。3節2行目はそのような現実逃避的行動によっては「安らぎは見出せない」というのだ（Saltersは申命記28・64を参照するよう指示している）。なお、旧約の民にとって、「安らぎ」の観念は、カナンの土地と不可分一体であった（申命記12・9参照）。3節3行目「袋小路で」の語義は明瞭ではないが、「狭い所の間で」のような意味とされる。1・6・2～3、1・13・2と同様、狩猟のイメージで語られている。

4節2行目「ため息をつく」は、この歌のキーワードの一つである。1・11・1参照。1・8・3および1・21・1では同じ動詞を「呻く」と訳した。1・22・3には、名詞「わたしのため息」が用いられている。4節3行目「苦悩する」は動詞jghのニファル分詞である。5節2行目の「苦しめる」は同じ動詞のヒフィール形である。この語もこの歌のキーワードの一つであって、1・12・3でも繰り返される。なおこの語の用例は旧約全体で8回しかないが、そのうちの5例が哀歌に集中する（哀歌3・32、33を参照）。4節3行目「彼女にはつらさがある」。直訳すると「彼女は自分に苦い」。

5節1行目「頭となる」の意味については、申命記28章44節を参照。政治的に圧倒的優位に立つことをさす。5節2行目「犯行」と訳したペシャアの語義については論争されているが、基本的な意味は、盗みのような「犯罪的行為」であると考えられるので、このように訳してみた。ただし1・14・1では「過誤」と訳した。

6節2～3行目は、狩猟のイメージで語られている。

7節1～3行目。7節だけが4行になっているので、ほとんどの注解者が2行目か3行目のいずれかを後代の加筆とみて削除する。Kraus、Fuerst、BHSの欄外注等は、2行目を削除する。この場合、3行目の「倒れた時」以下が1行目の「……の日々」を説明する文節として解釈出来、つづき具合がよいように思われる。しかし、Rudolph、Albrektsen、Kaiser等は、3行目を削除する。2行目削除説では「苦しみとさすらいの日々」が過去の⁽³⁾ことになって

しまうと言うのがひとつの根拠である。1～2行目をつづけて読んだ場合の訳は、「イエルサレムは、彼女の苦しみとさすらいの日々に、思い起す、いにしえの日々にあった彼女のすべての宝物を」のようになる。苦しみはむしろ現在のである。この説は、以下のような説明によっても強化されるだろう。

「宝物」と訳した語は、この歌のキーワードのひとつであり(1・10・1、1・11・2参照)、必ずしも神殿の財宝のような物質を意味するのではなく、「大切な人」をも意味し得る(2・4・2「いとしい者たち」、1・11・2)。3行目は、「宝物」の掠奪の状況を説明するための後代の加筆であるのだ、と。私訳が2行目を削除したひとつの理由は、この行の後句の動詞ハーヤーの用法にある。動詞ハーヤーは、この歌のキーワードとして多用されているが、⁽⁴⁾他の箇所では——21節3行目のjussiveでの用例を別にすると——、すべて完了形が「……となった」と現在の意味で用いられている。ここだけが過去に存在したの意味になる。このようなハーヤーの用法は、作品の緊張を損なうことになる。以上のような議論から、結論を引き出すことは困難であろう。MeekやHillersは、2種類のテキストが併存して流布していた可能性を示唆している。

8節1行目「重大な罪を犯した」。マソラでは、「罪」「間違い」を意味する語が、「間違いを間違った」のように名詞と動詞で二重に表現されている。

8節1行目後半「穢れた者」ニーダーは、ハバクスレゴメノンである。Rudolphなどはnwdからの派生語と見て、「(頭を)振ること」、つまり嘲りの動作と解釈する。しかしシュンマコス訳、シリヤ語訳等は、ニッター(1・17・3)と同じ意味にとる。この語は、元来月経による穢れをさす(レビ記15・19～33節)。13節の「さわりのある者(女)」と訳した語の類義語。2行目「恥部を見る」ことは、相手を侮辱する行為であった(創世記9・21以下、エレミヤ書13・25以下参照)。3行目「呻き声をあげ」。ガムを「声をあげて」の意味に解した(詩篇137・1「声をあげて泣いた」を参照。⁽⁵⁾人々に背を向けるのは恥じている動作である。

10節1行目「手を広げた」という表現は、災いを及ぼそうとしている敵に関するヘブライ語法としてはきわめて不自然である。「手を伸ばした」と訳

すことが多いが（新共同訳参照）、これは窮余の策にすぎない。17節1行目を参照して、ツァール「仇敵」をツイヨン「シオン」に変更する提案もある。「宝物」については、次節の注解参照。10節2行目「異邦人」ゴーイムは、1・3・2では「諸国民」と訳した語。

11節2行目「元気」ネフェシュは、「命」と訳されることが多いが、動詞「取り戻す」ないし「回復させる」との関連から「元気」と訳した。1・16・2参照。「彼らの宝物」は、2・4・2と2・20・2との比較から「幼な子」の婉曲的表現であると解釈される。カニバリズムを想起するからこそ、3行目でヤハウエに叫ぶのである。もちろん値打ちのある物を売って食料を買うようなこともあっただろうが（口語訳や新共同訳の解釈）、それはまだパンが町にあった時の話である。11節3行目前句「ヤハウエよ、見て下さい。ご覧になって下さい」は、2・20・1前句とまったく同一である。「卑しい女」（動詞 zll のカル分詞形）は、8節2行目の「彼女を卑しめた」（動詞 zll のヒフィル形）をも受ける。

12節1行目「あなた方のことではありません」。マソラには、ロー・アレーケム (lw' 'ljk m) とあるが、この二語に関しては、実に様々な解釈が提案されている。ローが「ない」を意味するのであれば、通常の綴り l' ではなくて lw' となっているのはなぜか。ローではなくて、ルー「おお！」と読むべきではないのか（ウルガタ訳を参照）。非常に興味深いことにマソラは、語頭の文字ラメドを通常よりも小さく書いている。これは筆写したマソラ学者が、文脈から見てどこか不自然な表現と感じたからであろう。しかしながらこの箇所を後代の付加であると判断して、単純に削除する訳には行かない。なぜならアルファベット歌としての性格上、この節はラメドで始まっていなければならないからである。Praetorius は、元々ここには動詞「来る」の命令形レクー (lkw)「さあ！」という呼びかけ語があったと推読した⁽⁶⁾ (Kraus、Kaiser が支持)。Provan は、ローを否定語にとるが、修辭的疑問文であると解釈する。つまり12節で「君たちのゆえにこうなったのじゃないですか」と問い掛けるが、その答えは18節にあるとするのである。君たちではなくて、神ヤハウエがわたしをこのようにしたのであると。この説も、やや苦し紛れの解

釈であるとの感じがする。ユダヤ教の伝統的解釈によると、この句は読者に対して「(これは、わたしに及んだ災いであって、) 君たちのことじゃあないんだ」「君たちに関することじゃあないんだ」と語っていると言う。イディッシュ語では病気や不幸について他の人に話す場合に「君たちのことじゃないよ (ロー・アレイヘム、あるいは *nischt gedacht far aich*)」というような表現をするが、これと類似した言い方がここに見られることになる (Albrektson、⁽⁷⁾ *Gottlieb* もこの説を採用)。いずれの解釈も満足なものではないが、ここにラメドで始まる語があったことだけは確実であろう。テキストを変更する十分な根拠がない以上、マソラを正文と見て、逐語訳を付けておくことにする。12節2行目「わたしの痛み」は、18節2行目を参照。12節3行目「燃え立つ御怒り」ハローン・アッポーは、同一の表現が4・11・1にも見出せる。

13節1行目「下らせた」は、七十人訳、シリヤ語訳などに基づく推読である (Hillers が採用)。マソラを逐語訳すれば「彼は高い所からわたしの骨の中にまで火を送り、そしてそれを踏みにじった」となる。Kaiser は、問題の動詞を「入り込ませた」と読んでいる。13節2行目には、再度、狩猟の比喩が出て来る (1・3・3、1・6・2～3 参照)。「わたしを仰向けにひっくり返した」ヘシーバニー・アーホールは、1・8・3「彼女は背を向けた」ワッターショブ・アーホールと類似する表現。13節3行目「荒れ廃れた女」シヨーマーマー。1・4・2でイエルサレムの門の荒れ果てた様を描くのに用いられた動詞 ^vsmm の分詞女性形が用いられている。同様の分詞男性形「荒れ廃れた者」が1・16・3に出現する。「さわりのある者」ダーワーは、1・8・1の「穢れた者」の類義語。KBL は、この箇所¹のダーワーを5・17・1とともに「病み衰えている状態」の意味にとっており、口語訳、新共同訳、新改訳もこのような解釈にしたがっている。しかし、この歌の描き出す女性のイメージは、穢れた卑しい女という点で一貫しており、このイメージをしばしば祭儀的な用語で表す。したがって「さわりのある者」という訳語を選んだ。

14節1～2行目は、古来意味不明の箇所とされている。マソラの1行目前句は、*nīsqad 'ōl p'sā'aj* (ニスカド・オール・ペシャアイ) となっている。

まず冒頭の動詞ニスカドの意味が分からない（推定される語根 *sqd* の用例は旧約には他にない）ことが、解釈を困難なものにしている。七十人訳やウルガタ訳の「彼は見張った」からは、動詞ニシュカド (*nišqad*) が推定される。マソラは二番目の語をオール「軛」と読んでいるが、この語も前置詞のアルと解釈出来るのではないかとの疑義が生じる。動詞ニスカドに対する「結びつけられる」という訳語は、中世のユダヤ人が文脈から推定したものであって確かではない。例えば KJV の *The yoke of my transgressions is bound by his hand* は、このような解釈によるものである（口語訳をも参照）。私訳「わたしに重くのしかかる」は、冒頭の二語をニクシュエ・アーライ *niqšū 'alaj* に読み変えて訳したものである（Rudolph の説による）。なおタルグムは、「わたしの過誤の軛は重い」と訳している。14節2行目「彼の軛が」は、シュンマコス訳などに基づく推読である。マソラの母音符号だけを付け替えれば、このように読める。「くじいた」は意識で、逐語訳すると「つまずかせた」ないし「よろめかせた」となる。14節3行目では、「ヤハウエ」ではなくて「主」アドーナイが用いられている。第1歌ではアドーナイは、他に15節で2回用いられているだけである。⁽⁸⁾

15節2行目の「祭り」は、歓声を挙げてイエルサレムに突入した敵の大軍を比喩的に表現している。2・7・3の「祭りの日のように」を前提とした表現である。また1・4・1の「祭りに来る者がいない」と比較せよ。この望まれなかった「祭り」は、「わたしの若者たちを打ち砕くため」のものであった。この動詞「打ち砕く」*šbr* が、第2歌の中央部に用いられているキー・ワードであることに注意せよ。15節3行目「ユダの娘」という表現は、2・2・2および2・5・3を参照。ただし、「おとめ、ユダの娘」という組合せはここにしかない。この行をマソラから無理に直訳すると「主は、おとめ、ユダの娘に対して酒槽を踏んだ」となる。酒槽を踏む時には、人々は歓声を挙げる（イザヤ書16・10、エレミヤ書25・30）。また、酒槽を踏む者の衣が赤くなる様子は、血を浴びた衣の比喩にも用いられる（イザヤ書63・2以下）。そのような意味を込めてユダの娘を踏みにじったのである。

16節1行目後句には「わたしの眼」が重複して出現するので、マソラの二

重書写(dittography)と見て一方を削除する者が多い。韻律法(Metrik)の観点からしてもマソラのままだと後句が4語となり、長すぎるように感じられる⁽⁹⁾。七十人訳、ウルガタ訳、シリヤ語訳は、いずれもマソラの誤記の可能性を示している。しかし、この13～16節では「わたし」が非常に強調されているから、技法上の重複である可能性も否定できない。

17節1行目の「手を広げる」動作は、神に祈る時のしぐさ(イザヤ書1・15、詩篇143・6参照)とも周囲にいる人々(12節の「道を通り過ぎて行くみなさま」参照)への訴えともとれる。17節2行目「彼を取り巻く者たち」と同じ表現は、エレミヤ書48章17、39節、詩篇76篇12節、89篇8節に見られる。17節3行目「穢れた者」は、8節1行目参照。この語の比喩的用法に関しては、エゼキエル書7章19～20節を参照。

18節1行目「ヤハウエは、義しい」は、神に反逆したイエルサレムとユダの民に対する神の審判が正当なものであったことを示す。いわゆる〈審判頌栄〉については、G・フォン・ラート著／荒井章三訳『旧約聖書神学I』(日本基督教団出版局)479頁を参照。「わたしが反抗した」は、1・20・2で反復される。18節2行目「わたしの痛みを見て下さい」は、1・12・1～2を参照。18節3行目「捕囚となって引かれて行った」を1・5・3と比較せよ。

19節3行目後句の動詞ヴェヤーシーブーは、ワウ+未完了形である。ここを普通に直訳すると「そして彼らは元気を回復するであろう」となって、不可解である。そこで11節2行目を参照して「元気を取り戻すために」に読み変える提案もある。私訳は、動詞ヴェヤーシーブーを *wajjašrû* ワイヤッシーウーに変更しての推読による(Ehrlichの説)。しかしながら、HillersやKaiserは、マソラのままでも目的文の「元気を取り戻すために」の意味になり得るとしている⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、食物を探しても無駄であったことを述べている文と解釈するしかない。

20節1行目「ヤハウエよ、見て下さい」以下は、第2歌の終決部2章20節以下と類似している。第2歌がすさまじいカニバリズムのありさまを描写するのに対して、第1歌はやや省察的になっている。「わたしの内蔵は煮え返る」は、2・11・1と語順が異なるが同一の表現。20節3行目後句の最後は、

kammāwāt カツマーウエト、直訳すると「死のような」となっている。「死だけが [ある]’ak māwāt と読み変えたり、「飢饉」kāpān と読み変えたりする提案があるが、私訳はアッカド語のカムートウー kamutu 「捕囚」をここに認める説をとる。つまりバビロンからの敵が繰り返し「捕囚」「捕虜」と口にしたと解釈するのである。

21節 1 行目「彼らは聴きました」を口語訳や新共同訳は、七十人訳やシリヤ語訳にしたがって命令形にとっている。しかし、この場合の命令形は 2 人称複数であって文脈に適合しない。マソラを正文とした方がよい。21節 3 行目「あなたは告げた日を来たせられる」。「告げた日」とは、イスラエルの復興の日でも敵の没落の日でもある。「来たせられる」と訳した動詞は、マソラでは完了形になっている。シリヤ語訳に従って「来たせよ」と読んだり、「来たせられた」とユダに既に起こった審判をさしているとする解釈もあるが、将来の出来事に完了形を用いたと考えてよい。

22節 1 行目の「して下さい」、2 行目の「あなたがなされた」の動詞「する」¹¹は、1・12・2 の「なされた」と同じ動詞。22節 2 行目の「犯行」と訳した語ペシャアは、1・5・2 「犯行」1・14・1 「過誤」と同じ語。22節 3 行目「病み衰えています」dawwāj は、1・13・3 の「さわりのある者」ダーワーと同一の語根からの派生語と考えられる。

5.3. 哀歌第 1 章の文学的技法

5.3.1. 段落構成

Renkema は、語句の分布を手がかりにしてこの作品全体をまず 1～11 節と 12～22 節の大段落 (Cantos) に区分し、これをさらに 1～6 節、7～11 節および 12～16 節、17～22 節の 4 つの中段落 (Sub-cantos) に分ける。⁽¹¹⁾ 各中段落は、1～3 節、4～6 節、7～9 節、10～11 節、12～13 節、14～16 節、17～19 節、20～22 節の合計 8 つの小段落 (Canticles) に分割することが出来ると言う。このような段落分けが正しいとすると、構造上 11 節と 12 節を中心にした鏡像関係が認められることになる。しかし Renkema には、作品に実際には存在しない整合性をもった構造を無理に認めようとする傾向がある。彼の方法は、同

義的あるいは対立的と彼がみなした語句の分布だけに頼っており、それ以上の（あるいは以下の）レベルの意味については、ほとんどまったく考慮していない。

まず2つの大段落への区分については問題がない。前半部（1～11節）では、見捨てられたひとりの女性として擬人化された都イエルサレムの窮状が描き出される。イエルサレムは、ユダ（3節）、シオン（4、6節）とも言い換えられるが、大部分は3人称で「彼女」と呼ばれる。第1大段落の2つの中段落への区分、これらを更にそれぞれ2つの小段落に分ける点については、Renkemaにしたがってよい。

問題は後半部（12～22節）の扱い方である。⁽¹²⁾前半部で擬人化された女性がまず「道を通り過ぎて行くみなさま」に対して（12節以下）、次に「ヤハウエ」に対して（20節以下）嘆きの声を挙げていることが、すぐに読み取れる。12節から始まる「わたし」の嘆きは、一応16節まで続いていると解釈できるが、これが全部「道を通り過ぎて行くみなさま」に向けて語られているのかどうかは明瞭ではない。17節は、明らかに前後の文脈から浮き上がっている。ここでは「わたし」は現われず、シオン、ヤコブ、イエルサレムに関して3人称で語られるからである。18節からは、再び「わたし」が語り出す。12節1～2行目に対応して18節2行目には「諸国の民はみな、聴いて下さい。そしてわたしの痛みを見て下さい」との呼び掛けがある。そして最後に20節以下のヤハウエに向けられた嘆願が来る。

作品の後半部では全体として「わたし」が語っているが、丁度中央に位置する17節で中断が起こっているから、ここを中心として12～16節、17節、18～22節の3つの段落に区分することが出来る。但し、20節で呼び掛ける相手が換わるから、18節以下は更に2つに分けられる。段落構成に関するこれ以上の考察は、5.3.7.で扱うことにする。

5.3.2. 否定表現の反復

第1歌においては「……ない」のような否定表現が非常に多く用いられている。これらの否定表現は、①非存在を表す名詞エーンで始まる名詞文の否

定表現(これを甲型とする)、②否定詞ローで始まる動詞文の否定表現(これを乙型とする)、③その他の否定表現(これを丙型とする)に大別できる。これらの否定表現を作品に出現する順序通りに列挙すると以下のようになる。但し、表現上の類似および相違が分かりやすいように、先に5.1.で呈示した訳文とは多少異なる訳にした場合がある。(この一覧では、例えば第2節2行目前句を2・2・前のように表記する)。

2・2・前	彼女には慰める者がいない	(甲型)
3・2・後	彼女は安らぎを見出さない	(乙型)
4・1・後	祭りに来る者がいない	(丙型)
6・2・後	彼らは牧草を見出さない	(乙型)
6・3・前	力なく	(丙型)
7・3・後	そして彼女には救ける者がいない	(甲型)
9・1・前	彼女は自分の終わりを思わない	(乙型)
9・2・後	彼女には慰める者がいない	(甲型)
10・3・後	あなたの集会に彼らは入ってはならない	(乙型)
12・1・前	あなた方のことではありません(?)	(丙型)
14・3・後	わたしが対抗することの出来ない	(乙型)
17・1・後	彼女には慰める者がいない	(甲型)
21・1・後	わたしには慰める者がいない	(甲型)

5つの甲型の文は、よく似ているか、同一である。語順が異なることはあるが、「彼女には慰める者がいない」という同一の文が3回出て来る。他には、「彼女」が「わたし」に換わった文が1回(21節)、「慰める者」が「救ける者」換わった文が1回(7節)となっている。これらの甲型の否定表現は、全体にわたって分布しており、いわば作品の通奏低音となっている。

16節2行目前句には、否定文ではないが「まことに慰める者はわたしから遠い」というほとんど同じ意味の文があることも注目される。

乙型の文も5つあるが、相当の変異が認められる。ただし、3節と6節の

文は類似している。動詞を見ると、完了形が3回（3、6、9節）、未完了形が2回（10節、14節）である。

12節2行目は、「あるかどうか」イム・イエーシュではじまる間接疑問文（名詞文）であって、意味的には否定文になる。以上のような否定文の多用は、この〈捨てられた女〉の *elegy* に独特の哀調を与えている。

5.3.3. 並行法（パラレリズム）と詩的イメージ

通常、ヘブライ詩においては、1詩行を構成する前句と後句の間に並行法が認められる。しかし哀歌の場合、5つの歌の詩行の構成の仕方はそれぞれ独特であって、G.B.Grayの研究が示しているように問題は単純ではない。⁽¹³⁾ 伝統的な意味での内的並行法 (*internal parallelism*)、つまり前句と後句の平行法が比較的容易に見出せるのは、第5歌の場合である。5章1～4節には同義的並行法が認められるが、その1例（5章4節）を示す。なお、マソラからの転記に際しては子音テキストをそのまま置き換えた。

m j m j n w	b k s p	š t j n w	
我々の水を	銀をもって	我々は飲む。	（前句）
‘š j n w	b m ḥ j r	j b’ w	
我々の木々は	代価によって	入って来る。	（後句）

これはいわゆる完全並行法であるが、主語が交替している。動詞の用法を見ると、「飲む」は完了形、「入って来る」は未完了形になっている。第2歌には、内的並行法がかなり認められるが、第1歌にはほとんど認められない——例えば1・5・1等には同義的並行法が見られるが——。第2歌に、詩行と詩行の間のいわゆる外的並行法 (*external parallelism*) を見つけることも比較的容易である。しかしながら、第1歌の場合は事情がまったく異なっている。ここに教科書的な意味での並行法を発見しようとする途方に暮れるしかないだろう。同義語や反対語は、通常の並行法の場合とは異なった仕方で配列されているのに違いない。例えば、4節を観察して見よう。

シオンへの道は、嘆いている。 / 祭りに来る者がいないのだ。
 彼女の門はみな、荒れ廃れて、 / 祭司たちは、ため息をついている。
 彼女のおとめたちは、苦悩する。 / そして彼女には、つらさがある。

ここには「嘆く」「ため息をつく」「苦悩する」という動詞の類義語があり、名詞「つらさ」もある。3行目の前句と後句に同義的並行法を認めてもよいだろう。それぞれの詩行がほとんど同じことを言っていることもすぐに了解できる。それにも拘らず、これを同義的な外的並行法の典型であるとは言えない。それはどうしてか。4節を構成する6つの句の主語を見ると、全部異なっているのである。しかし述語の部分の意味は、重なり合う。ここで重要なのは、形式的な並行法の使われ方ではなくて、共通のイメージを積み重ねて行く技法である。このような技法上の特徴は、第1歌の他の部分にも顕著に見られる。したがって、3詩行から構成される各節（これは、*strophe*〈連〉）に相当すると考えてもよい）や各小段落に共通するイメージを発見することが解釈にとって決定的な意味をもつ。

第1歌の冒頭部は、作品全体にとって——第1歌のみではなく、作品集としての〈哀歌〉全体にとっても——独特な意味をもっている。ここでは非常に巧みな詩的技法が使われており、並行法も相当の役割を演じている。まず、1節から観察して見よう。

' j k h				
ああ何と				
j š b h	b d d /	h ' j r	<u>r b t j</u>	' m //
彼女は座っている	独りで	この町が	多くいた	民の
<u>h j t h</u>	k' l m n h /	<u>r b t j</u>	b g w j m //	
なった	寡婦のように	大いなる者	諸国民の中で	
ś r t j	b m d j n w t /	<u>h j t h</u>	l m s //	
女王	諸国の中の	なった	隷属の身に	

1行目から3行目の前句と後句は、すべて意味的に対立している（対立的並行法）。過去において繁栄していた大なる都が、現在は人の住まない荒れ果てた場所となったことを、捨てられた一人の女の比喩を用いて描く。このような過去と現在の町の状態のコントラストが、3つの内的並行法を特徴づけている。次に1行目と2行目の外的並行法を観察しよう。1行目前句と2行目前句、1行目後句と2行目後句が同義的(synonymous)であることは明白である。1行目後句の rbj と2行目後句の rbj に、若干の意味のずれがある点も興味深い。2行目と3行目にも同義的並行法が認められるが、語順が異なっている。並行する語として、まず「なった」 hjth がいずれの行にもある。「寡婦のように」は「隷属の身に」と、「大なる者」は「女王」と、「諸国民の中」は「諸国の中」とそれぞれ並行関係にある。「隷属の身」と訳した最後の語マス mas は、本来「強制労働」を意味するから厳密には「寡婦」と同義的とは言えない。しかし、ここに abcd/cdab（ないし AB/BA）のような交差配列を示す同義的並行法が成立していることによって、マスが「寡婦」と一種の等価性を獲得することになる。⁽¹⁴⁾あるいは、イメージの上で重なり合うと言ってもよいだろう。ぼつんと見捨てられた荒廃した町が、昔は仲間がたくさんいたのに、今は一人住まいの寡婦として暮している女性のイメージ、また、かつては召使に囲まれていた女王が、今は苦役に服する奴隷となったひとりの女のイメージをもって描き出される。このようなイメージは、次の第2節で増幅される。ここには恋人(複数!)に裏切られて見捨てられた女がいる。

b k w t b k h b l j l h / w d m ' t h ' l l h j h
 泣きを 彼女は泣く 夜に 彼女の涙は 上 彼女の頬の
 ' j n l h m n h m / m k l ' h b j h
 いない 彼女に 慰める者が 全ての者から 彼女の愛人たちの
 k l r ' j h b g d w b h / h j w l h l ' j b j m
 全て 彼女の恋人たちの 裏切った 彼女を なった 彼女に 敵に

1行目の前句と後句には、同義的並行法を認めてよいであろう。2行目後句と3行目前句の「彼女の恋人たちの全て」は明らかに同義的である。3行目の前句「彼女を裏切った」と後句「彼女の敵となった」も同義的である。さらにこれらと「彼女に慰める者がいない」は、意味が重なるから2行目と3行目にはあまり明瞭ではないが、一種の並行関係が成立する。1節と2節を比較して異なるのは、1節が状態の変化を穏やかに描いているのに対して、2節では動的な表現が目立つ点である。2節2行目は名詞文であるが、1行目と3行目は動詞文であり、「泣きに泣く」「裏切って」「敵となる」のような強い同義語反復の技法が用いられている。2節には、アリタレーションも目立つ。まず、語尾には圧倒的に /a/ が多い(8回)が、これは「彼女の」を意味する接尾辞が多いことと関係する(7回)。*/l/* 音は全体に多い(9回)。1行目前句には、明確に */b/* 音のアリタレーションが認められる。

1～2節では、町が擬人化されていることは分かるが、それがどこの町であるのかは明示されていない。3節になって「ユダ」が、そして4節でようやく「シオン」が登場することになる。

5.3.4. ハーヤー動詞の用法

第1歌では、ハーヤー動詞の用例がきわめて多く、独特の使われ方をしている。これらを順序通りに列挙すると以下ようになる。

- 1・2・前 彼女は寡婦のようになった(hjth)。
- 1・3・後 彼女は隷属の身となった(hjth)。
- 2・3・後 彼らは彼女に敵となった(hjw)。
- 5・1・前 彼女の仇敵は頭になった(hjw)。
- 6・2・前 彼女の高官たちは鹿のようになった(hjw)。
- [7・2・後 それらはいにしえの日にあった(hjw)]。
- 8・1・後 それ故に、彼女は穢れた者になった(hjth)。
- 11・3・後 まことに、わたしは卑しい女になった(hjtt)。
- 16・3・前 わたしの息子たちは、荒れ廃れた者となった(hjw)

17・3 イエルサレムは、穢れた者になった(hjth)。

21・3・後 彼らがわたしのようにになりますように(wjhjw)。

最後の用例だけが、未完了形(jussive)で他はすべて完了形である。これらの完了形の用例の中で、7節2行目だけが意味的に他と異なっている。おそらくこの行は後代の付加であろう(5.2.の語句注解参照)。この箇所を削除すると、第1歌でのハーヤーの意味は、すべて「なる」であって、完了形は現在の状況と関係している。3人称女性単数形のhjthが、4例あるが8・1と17・3では「穢れ」と関係する。11・3は、同じ内容を「わたし」の側から言い換えたものと解釈される。3人称複数形のhjwは、4回用いられている。16・3では「わたしの息子たち」が主語になっているが、穢れた女、卑しい女のイメージと重なり合う。6・2では、狩猟の比喩が用いられている。他の2例は、敵と関係する。

このように動詞ハーヤーが、イエルサレムの擬人化の技法と深く結合していることが注目される。

5.3.5. 擬人化の技法

すでに繰り返し見てきたように、イエルサレムの町の一人の女性への擬人化は、第1歌では作品全体を通して徹底的に遂行されている。このこととの関連で、ユダの周辺諸国も擬人化されて表現される。「彼女の愛人たち」(2・2)、「恋人たち」(2・3)、「彼女を尊敬していた者たち」(8・2)、「わたしを愛した者たち」(19・1)という表現がそれであって、いずれも複数形である。ユダやイスラエルと同盟関係を結んだエジプト、エドムなどの諸国家を「愛人」や「恋人」に喩るのは、哀歌独自のものではない。ホセア以降の預言においては、外交関係を男女の関係、特に姦淫や売春に喩ることがよく行なわれた⁽¹⁵⁾(ホセア書8・9、エゼキエル書16・26以下、ナホム書3・4等)。哀歌第1章は、このような伝統的な修辭法を巧みに応用したのである。

今は敵となってしまったかつての恋人たちとの関係で、「いない」とされる「慰める者」(2・2等)、「彼女を救ける者」(7・3)、「わたしの元気を回

復させる者」(16・2)が問題となる。これらの表現は、興味深いことに単数形になっている。これは比喩のレベルでは「夫」になるはずのヤハウェを暗示している(ホセア書2・18参照)。

擬人化の技法との関連で、比喩的ではない仕方でも第1歌に登場するエルサレムの住民たちの群れを列挙すると以下ようになる⁽¹⁶⁾(但し接尾辞「彼女の」「わたしの」は省略して表記)。「祭司たち」(4・2)、「おとめたち」(4・3)、「幼な子たち」(5・3)、「高官たち」(6・2)、「民」(7・3、11・1)、「若者たち」(15・2)、「息子たち」(16・3)、「おとめたち」「若者たち」(18・3)、「祭司たち」「長老たち」(19・2)。軍勢をさす「わたしのすべての強者たち」(15・1)もこのリストに加えられるだろう。これらのエルサレムの住民を表示する語には、すべて「彼女の」「わたしの」という接尾辞が付けられることによって、擬人化された町という詩的イメージとの融合が起こる。

15節3行目の「おとめ、ユダの娘」は、一応6節1行目の「シオンの娘」の言い換え——つまり比喩的表現——と考えられるが、歴史的存在としての「おとめ」と意味的に重なり合う。字義通りの「おとめたち」という表現が他にある上に(4・3、18・3)、直前の詩行の「わたしの若者たち」(15・2)と並行関係に置かれているからである。雄叫びを挙げてエルサレムに侵入した敵軍が、若者たちを粉碎し、返り血にまみれながら娘たちを暴行する。そのようなイメージを祭りと酒槽の比喩を用いて語る。同時にそのような出来事が偶然に起こったのではなくて、ユダの罪に対する「主」の恐るべき御業⁽¹⁷⁾として起こったことを告げるのである。

第1歌が、ヤハウェの審判の結果として受けた都エルサレムの苦難を、女性の穢れとして語るその語り口は独特である。「穢れ」を指す語ニッダーの元の意味は「月経」であって、このような出血を穢れとするのは祭儀的な規定に基づく(レビ記12・2以下、15・19-33)⁽¹⁸⁾。「不浄となる」と訳した語ターメーも祭儀的な用語である(レビ記11章以降に頻出)。このような清淨と不浄という概念の枠組みの中で事態を把握しようとする一種のこだわりは、第1歌の著者が祭司的なグループに属していたことを推定させる。第2歌に比べて軍事的敗北に関する具体的叙述が乏しいことも、おそらくこのこ

と関係するのであろう。

5.3.6. 重畳表現とアリタレーション

すでに考察した語以外で、第1歌で頻繁に用いられている語としては、まずコル「すべて」が挙げられる。私訳では「みな」と訳した場合が多い。2・3 (2節3行目の意。以下同様)、3・3、4・2、6・1、7・2、8・2、10・1、11・1、12・1、13・3 (「終日」コル・ハッヨーム)、15・1、18・2、21・2、22・1、22・2の合計15箇所て用いられている。これは異常に多いと言ってよい。何事も徹底的に遂行されたことを印象づける働きをしている。

動詞「見る」(r'h)の分布には、特徴がある。まず7・3から12・1までに6回用いられている(7・3、8・2、9・3、10・2、11・3、12・1)。この中で特に印象的なのは、類義語 nbt (「眺める」。私訳では「ご覧になる」)と並列されている11・3と12・1の用法である。語順は、r'h-nbt(11・3)、nbt-r'h(12・1)と交差配列になっている。「敵」が、また「彼女」が「見た」という現実を受けて、「ヤハウエ」に(9節、11節)あるいは「道を通り過ぎて行くみなさま」に(12節)「見て下さい」と嘆願するのである。「見て下さい」との嘆願は、作品の終決部にも出て来るが、今度は「聴いて下さい」と対になっている(18・2)。20節では「見て下さい」は単独で用いられているが、この周辺に類義語の「探し求める」(19・3)と「聴く」(21・1、21・2)があることが、注目される。

アリタレーションは、先に考察した2節以外でも頻繁に見つけられる。例えば、先に掲げた1節1行目では、/b/音が重複する。その他の箇所て特に印象的なのは、接尾辞の「わたしの」(単数では i、複数では aj となる)が反復される14~16節である。この箇所て「ヤハウエ」が「主」アドーナイに換わっている理由は、このことから説明可能である。15節1~2行目のマソラを転記すると以下ようになる。

sillā^h kāl 'abbîraj 'dōnāj b'qirbī
qārā' 'ālaj mō'ēd lišbōr baḥûrāj

まず、母音の /a/ /i/ ないし半子音 /j/ の重畳が目立つ⁽¹⁹⁾。子音の /l/ と /r/ /b/ によるアリタレーションも認められよう。

16節2行目には、/m/ /n/ 音のアリタレーションが見られる。

kî rāḥaq mimmännî m^hnaḥēm mēsib napsî

18節から20節には、「反抗する」mrh (18・1・後、20・2・後)、「見殺しにする」rmh (19・1・後)、「煮え返る」ḥmr (20・1・後) の3つの動詞を用いた語呂合わせがある。これらは全て詩行の末尾に配置されているので効果的である。20節1行目後句から2行目後句までを転記すると以下のようになる。

mē'aj h^hmarmārū
nāh'pak libbî b'qirbî
kî mārô mārîti

ここには、/m/ /r/ 以外に、2行目前句の /b/ 音、2行目の /i/ の重畳も認められよう。

5.3.7. ま と め

段落構成に関する先の考察に基づきながら、各段落の内容、特徴、イメージの推移等を以下にまとめる。

《第1大段落》1～11節 イエルサレムは、3人称単数女性形で描かれる。

中段落 A：1～6節

イエルサレムの現状の描写。ハーヤー動詞が5回用いられている。

小段落 A-1：1～3節

「この町」が、見捨てられた孤独な女のイメージをとって描かれる。冒頭部には、過去と現在の対照が明瞭に表現さ

れた部分がある。最後の行に狩猟の比喩がある。

小段落 A-2 : 4~6 節

巡礼の絶えたシオン。嘆き悲しむ町の住民と栄える敵とが対照をなす。中央には、彼女の苦しみがヤハウエによるものであることを語る行がある。最後の2行に狩猟の比喩が再度現われる。「来る」「歩く(行く)」「去る」「追う」のような移動を表す語が多用されている。

中段落 B : 7~11 節

イエルサレムの破滅的出来事への回想。「見る」が5回用いられている。

小段落 B-1 : 7~9 節

女性の穢れのイメージが支配的である。ヤハウエへの嘆願で閉じられる。

小段落 B-2 : 10~11 節

敵の聖所への侵入と激しい飢饉の出来事の回想。ヤハウエへの嘆願で閉じられる。

◀第2大段落▶12~22節 17節での中断があるが、「わたし」による語りが支配的である。

中段落 C : 12~16 節

道を行く人々への呼び掛けから始まり、過去の出来事の回想へと移行する。常に「わたし」が問題となっていることと関係して i, aj の脚韻が目立つ。13~15節の回想部分では、動詞は完了形が優勢になっている。これに対して16節1行目の動詞は、分詞形である。以下のように3つの小段落に区分することも可能である。

小段落 C-1 : 12 節

この部分だけを呼び掛けと考えることも出来る。

小段落 C-2 : 13~15 節

過去の出来事の回想。狩猟、女性の穢れ、祭り、酒槽など

様々な比喩が用いられる。

小段落 C-3 : 16節

時が、現在に回帰して来る。詩人は涙を流す。

中段落 D : 17節

「わたし」の語りが中断され、3人称での叙述に戻る。男性形の「ヤコブ」も登場する。

中段落 E : 18~22節

「わたし」による語り。動詞「見る」と「聴く」が5回用いられている。18~20節には、mr音の語呂合わせが見られる。

小段落 E-1 : 18~19節

12節の呼び掛けを受けて、「諸国の民」への呼び掛けが来る。「わたしの痛み」という語も共通する。「おとめ」「若者」「祭司」「長老」が登場。

小段落 E-2 : 20~22節

9節3行目、11節3行目を受ける形での「ヤハウエよ、見て下さい」との嘆願。敵に対する応報のモチーフで閉じられる。

第1歌では、第2歌に見られたようなイエルサレム破滅の出来事への歴史的証言としての性格がやや後退している。身体的なレベルでの苦悩よりも内面的な痛み、苦しみの方が優勢になっているが、これは事件の後少し時間が経過してから書かれたという事情が反映しているためと思われる。全体として回顧的、省察的な雰囲気を持つが、イエルサレムの滅亡から長い時間が経過しているわけでもないようである。第2歌の次に執筆されたものと考えられる。著者は、祭儀的用語を好んで使う点から考えて、祭司サークルの一員と推定される。詩的技法、特に比喩の巧みさや独特の詩行の構成法において注目すべき作品である。

注

- (1) 語句注解には、注をなるべく省略する。参照した注解書および哀歌に関する主要な研究書を以下に列挙しておく。

《注解書》

Karl Budde, *Die Klagelieder* : KHC XVII (1898)

A.Cohen (ed), *The Five Megilloth, Sontino* (1946, 1983) 68ff.

C.F.Keil, *Jeremiah, Lamentations* : Commentary of the OT in Ten Volumes. by C.F.Keil and F.Delitzsch, VIII, Eerdmans (1978)

T.J. Meek and W.P. Merrill, *The Book of Lamentations* : IB6, New York and Nashville (1956)

Hans-Joachim Kraus, *Klagelieder* : BK XX (1956, 1983⁴)

Wilhelm Rudolph, *Die Klagelieder* : KAT XVII (1962)

Otto Plöger, *Die Klagelieder* : HAT I, 18 (1969)

Delbert R. Hillers, *Lamentations* : AB 7 A (1972)

Iain W. Provan, *Lamentations* : NCB (1991)

Otto Kaiser, *Klagelieder* : ATD16/2 (1992)

W・J・フュアースト著、高尾哲訳「哀歌」『ケンブリッジ旧約聖書注解11』新教出版社(1981年)

O. カイザー著、武田武長訳「哀歌」『ATD 旧約聖書注解16』ATD・NTD 聖書注解刊行会(1989年)。なお、この邦訳はATDの古い版(1981年)からの翻訳である。

木田献一著「哀歌」『新共同訳旧約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局(1992年)501頁以下。

《研究書》

Arnold B. Ehrlich, *Randglossen zur hebräischen Bibel*, VII. Leipzig (1914) 30ff.

G.R.Driver, *Hebrew Notes on Song of Songs and Lamentations* : FS A. Bertholet, Tübingen (1950) 136ff.

B. Albrektson, *Studies in the Text and Theology of the Book of Lamentations with a Critical Edition of the Peshitta Text*, StThL 21, Lund (1963)

H. Gottlieb, *A Study on the Text of Lamentations*, AJut XLVIII, Th.S. 12, Aarhus (1978)

Renate Brandscheidt, *Gotteszorn und Menschenleid*, TThSt 41, Trier (1983).

- (2) R.B.Salters, *Lamentations 1. 3. : Light from the History of Exegesis*, in : J.D. Martin and P.R.Davies (eds), *A Word in Season : Essays in Honour of William Mckane* (JSOTS 42) Sheffield (1986) 73-89.

- (3) Jenni/ Westermann, *Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament*, Bd. II, München / Zürich (1976) 488ff. の R.Knierim による「ベシヤア」の項目

- を参照。
- (4) 本稿「5.3.4. ハーヤー動詞の用法」を参照。
 - (5) T.F.McDaniel, *Philological Studies in Lamentations* : *Biblica* 49 (1968) 31f. ; Hillers=注(1)10. ただし、Provan=注(1)は、この説に批判的で、ガムは普通の意味の「…もまた」であるとす。つまり、イエルサレムもまた彼女自身を恥じて呻いたのだと解釈する。
 - (6) Franz Praetorius, *Threni I*, 12. 14 II, 6. 13. , *ZAW* 15 (1895) 143.
 - (7) Gottlieb=注(1)16.
 - (8) 本稿「5.3.6. 重畳表現とアリタレーション」を参照。
 - (9) 哀歌の韻律法に関する K.Budde 以来のいわゆる「キーナー調」が支配的であるとの説は、まったく間違っていないとしても、これを正文批判の道具とするのは見当違いである。他の観点からも十分考えてみる必要がある。
 - (10) Wilhelm Gesenius' *Hebräische Grammatik völlig umgearbeitet von E.Kautzsch, Georg Olms Verlag* (1983) 107q. 参照。
 - (11) J.Renkema, *The Literary Structure of Lamentations* : W.van der Meer and J.C. de Moor, eds., *The Structural Analysis of Biblical and Canaanite Poetry*, *JSOTS* 74 (1988) 305.
 - (12) Kaiser=注(1)S. 127ff. の考察が妥当である。
 - (13) G.B.Gray, *The Forms of Hebrew Poetry*, *KTAV* (1915, 1972) 87ff. は、古典的な価値をもつ著作として評価される。
 - (14) パラレリズムにおける等価性の概念については、Yu.M. ロトマン著／磯谷孝訳『文学理論と構造主義』勁草書房（1978年）170頁以下を参照。
 - (15) Jörg Jeremias, *Der Prophet Hosea* : *ATD*24/1, *Göttingen* (1983) 109.
 - (16) 哀歌に登場する様々な人間群像に関しては、Michael S. Moore, *Human Suffering in Lamentations* : *Revue Biblique* 90 (1983) 534--555を参照。
 - (17) 酒槽の比喩に関しては、Kaiser=注(1) 127を参照。
 - (18) 木田献一は、哀歌の用いている比喩を「女性差別的」というが(=注(1) 505頁)、全く別種の文明に生きている現代人の側からのこのような価値判断は無意味である。レビ記は、男性の「精の漏出」についても語っているからである(15・16以下)。旧約時代の浄・不浄の区別は、古代イスラエル人の生きていた社会の構造全体から理解されなければならない。メアリ・ダグラス著／塚本利明訳『汚穢と禁忌』思潮社（1995年）参照。彼らが経験した破滅的な社会秩序の崩壊は、まさに自身の「穢れ」として自覚されたのである。支配階級の側にあった祭司たちには、それは特に強烈なものであったと想像される。
 - (19) この場合は、アソナンス *assonance* の一種と言うべきかも知れないが、筆者はアリタレーションの概念を拡張して用いる。拙論「創世記テキストにおける語りの技法」『基督教学研究』第4号（1981年）139頁参照。